東北工業大学
同窓会ニュース
vol.
13
2009.AUG

A Graduates' Association News of
TOHOKU INSTITUTE OF TECHNOLOGY

工大人

Kodai Jin!

NETWORK NETWORK NETWORK

第25回定時総会・懇親会
2009年9月26日（土）・16：30～
仙台国際ホテルで開催！

1 ●ごあいさつ
理事長 岩崎 俊一氏
学　長 沢田 康次氏
5 ●特集／恩師からの便り
知能エレクトロニクス学科　榎本 幹氏
建築学科　小野 英哲氏
建築学科　小野瀬 順一氏
8 ●活躍する工大人
(有)祥和舎　山岸 義彦氏
由利設計工房　由利 収氏
(独)鉄道建設・運輸施設整備機構　佐藤 文英氏
前群馬県立高等学校　堀口 義雄氏
(株)フォルム　松本 有氏
(株)インタージェム　佐藤 郁雄氏
(株)庄司組　庄司 一重氏
15 ●工大人同窓会・座談会
（株）システムズ（電子・通信工学科編）
21 ●インターンシップ体験記
23 ●支部活動報告
青森県支部
新潟県支部
25 ●同窓会からのお知らせ・お願い
★一番町ロビー／卒業生の作品展示を支援します！
津田 幸範氏（工業意匠学科７回生）
吉村 東氏（建築学科10回生）
26 ★メールアドレスを知らせてください！

ごあいさつ

東北工業大学の新たな環境

創立以来45年の歴史を持つ東北工業大学は、これまで2万9千名余の卒業生を社会に送り出し、わが国、とくに東北地方の産業、経済の発展に著しい貢献を行ってきました。

多数の卒業生諸君が各地で活躍し、母校の評価を高めている姿を見ることは、理事長としての大きい喜びです。

また私の工大勤務も平成元年以来21年目になり、私なりに「工大人」としての責任を果たしてきたと考えています。

去る3月24日、私は（財）郵政福祉の長原 栄会長に会い、これまでの郵政（互助会）からの本学に対する支援について感謝状を贈呈してまいりました。すなわち本年3月末で、本学創立以来の郵政との経営上の協定がすべて終結したためです。

私の赴任当時、理事長はもちろん局長、課長等の幹部職員がすべて郵政出身のため、教育側との意志疎通が不十分なための欠陥が目立ちました。今このように、穏やかな形で経

八木山キャンパス新1号館

理事長
岩崎 俊一（いわさき　しゅんいち）氏

1926年８月生　福島県出身
1949年３月　東北大学工学部通信工学科卒業
1959年４月　工学博士（東北大学）
1964年６月　東北大学電気通信研究所教授
1986年４月　東北大学電気通信研究所長
1988年10月　中国蘭州大学校名誉教授
1989年４月　東北工業大学 学長
1989年４月　東北大学名誉教授
1991年７月　日本学術会議会員
1992年４月　東北工業大学大学院工学研究科長
1999年６月　中国ハルビン工業大学名誉教授
2001年10月　中国長春光学精密機械学院（現長春理工大学）名誉教授
2003年11月　叙勲 瑞宝重光章
2003年12月　日本学士院会員
2004年９月　学校法人 東北工業大学 理事長･学長
2008年４月　学校法人 東北工業大学 理事長（現在に至る）

営の委譲が行われたことに私は深い感慨を覚えています。これは時代とともに大学の姿が大きく変わり、また郵政自身も変わった結果と言えるでしょう。

来年はまた、本学および工大高校発足の母体となった学校法人東北電子学院創立（昭和35年）の50年目に当たっています。

50年は人生では知命、すなわち天が与えた道を進む年ですが、奇しくも本学では昨年から社会への真の融合を目指して工学部、ライフデザイン学部による教育研究を行うようになりました。

少子化時代、大学間競争がさらに激化することが予想されますが、教育と研究の質を高めて社会の信頼に応え困難な時代を乗り越えたいと思います。卒業生の皆さんからのご支援を期待します。

ごあいさつ

東北工業大学大学院のご紹介

TOHOKU INSTITUTE
OF TECHNOLOGY

学長
沢田 康次（さわだ　やすじ）氏

1937年10月生　大阪府出身
1962年３月　東京大学大学院工学研究科電子工学　修了
1966年８月　ペンシルバニア大学大学院
　物理学教室博士課程　修了
1973年10月　東北大学　教授
2001年４月　東北工業大学　教授
2006年４月　東北工業大学　副学長
2008年４月　東北工業大学　学長

本学の大学院は1994年から次々と設置され、現在、電子工学専攻、情報通信工学専攻、建築学専攻、土木工学専攻、デザイン工学専攻、環境情報工学専攻の６専攻から成る工学研究科があります。（http://www.tohtech.ac.jp/dept/graduate/index.html）

一般的に言って、大学院の目的は、高度社会人養成、高度技術者養成ですが、同窓生の皆様には、ふたつの面からご注目いただき、是非ご活用いただきたいと考えます。

その一つは、同窓生の皆様のご子息、ご息女の大学院進学に対するご理解、もう一つは、社会人としてのご自身のプロフェッショナルに関するご支援の可能性についてであります。

前者につきましては、現代のように社会がグローバル化・流動化しますと、能動的な勉強期間が学部の４年間では十分でなくなり、大学院生への社会の要求が増大し、全国平均でみますと、工学部生の６人のうち一人は大学院に進学しています。ご本人にとっても、能動的な勉強を身につけて社会に出、能動的に生きることができる方が幸せです。

後者につきましては、たとえば建築学科には、大学院プロフェッショナルコースに設置されていまして、実務と直結した科目とケーススタディによる学習を中心とする新しいタイプの実践型カリキュラムが用意されています。プロフェッショナル教育に特化したカリキュラムは、国家試験（１級建築士、技術士など）を目指す社会人の能力向上を建築の様々な分野から支援できる内容で構成されています。ほとんどの科目が、ｅラーニング教材として整備されますので、いつでも、どこでも働きながら自由に学ぶことができます。

入学手続、期間、経費などについては、学務課(022-305-3161)にお問い合わせください。

工大人はいい人間だ

知能エレクトロニクス学科
榎本　幹（えのもと まさる）氏
1939年　栃木県生まれ
1968年　東北工業大学電子工学科卒
1971年　東北工業大学助手
1999年　教授
2009年　退職・名誉教授

昭和39年4月、本学創設の時に1回生として入学しました。当時、教務部長をされていた吉田賢抗先生は、初めての講義の折に開口一番、4年後の諸君を社会が評価する東北工業大学の特色を今から樹立させようではないかと提唱されました。いろいろあろうが「いい人間の工学知識人」はどうだろう。これが賢抗先生の提案でした。「いい人間」になるのは心掛けひとつ、誰でも出来るはずです。この人間性の上に、学問に裏打ちされた知識や思考方法を積み重ねるというものです。学生時代はこういった目標で努力をしようということでした。

あれから45年の時が経過しました。私は母校の教員へという道を歩み、この3月に退職しました。この間、新入生の研修に始まり、授業や卒業研修そして就職の相談など充実した毎日を送りながら、「東北工大の卒業生はいい人間で使える」の評を得られるよう努力してきたつもりです。結果的に「東北工大の卒業生はよい」という評価を社会から得ていると考えています。その証拠は毎年の多くの求人会社数に端的に表れていると思います。卒業生の活躍があってこその新規求人であり、多くの会社がリピーターとして求人票を送ってくれています。

私の教え子の一人が言っていたことを思い出します。「大学での成績は取り敢えず60点取れればいいやであったけど、仕事に対する評価では常に100点満点が要求されます。これが毎回出来ているのだから自分でもすごいと思いますよ。」彼は自分の仕事が社会の役に立っていることを認識して、いい工大人になったのです。

東北工業大学は創設から間もなく50年を迎えます。いろいろな面で工大はいい大学になってきたと感じるのは私だけではない筈ですが、これからの50年は平坦ではありません。工大人としてそれぞれのスタイルで東北工業大学を応援し、いい工大人を増やしましょう。

やっぱり若い人はいい

建築学科
小野　英哲（おの ひでのり）氏
1941年　（岩手県生まれ）宮城県出身
2001年　東北大学助手、東京工業大学助手、同助教授、同教授を経て東北工業大学教授
2009年　東北工業大学退職
現　在　東京工業大学名誉教授
東北工業大学名誉教授

東北工業大学をこの3月退職し、青春時代および東北工業大学での8年間の3度目の大学教員生活を過ごした仙台を離れてからはや3ヶ月経ちました。

横浜の自宅でカミさん手作りの食事を味わいながら論文を書くなどの何不自由ない年金生活を送る予定でしたがまったく予想外の毎日を送っています。

- 各種工業界、学会、委員会、JIS委員会、スポーツ団体、等の諸会議
- 国内外からの依頼講演
- マスコミ関係の取材
- 私が主催している研究会（床性能研究会）での委託研究、など

以上が忙しくなっているおもな理由ですが、東北工業大学在任中は講義、研修などのため断ってきたツケが一挙に舞い込んできている状況です。

あらためて、学生、院生、若手教員と夜遅くまで議論した東北工業大学在任中をなつかしく振り返っています。

出来事としては

- すぐれた研究論文を当該学会に数多く発表した後、課程博士号を無傷で立派に取得した女性が現在は国の中枢研究機関で期待されつつ活躍していること。（非常勤ですが‥‥。）
- 学科の院生の皆と夜遅くまで私の大好きな酒、タバコ（秘密！！‥‥時効）の雰囲気の中で研究論議に熱中したこと。
- 研究室で院生、学生と苦労した成果に対し、日本建築学会では極めてまれとされる2度目の学会賞が授与され、大いに東北工業大学の存在の大きさを多方面にあらためて知らさしめたと皆で喜んだこと。

などなどを忙しいなかいつも思い出していますが、特に私が問いかけてきたのは、“誰のための学問・研究か”でした。

この問いに対する解を述べる余裕はありませんが真剣に議論し、対応してくれたのは学生・院生を中心とする若い方々が中心でした。

このような背景が退職して雑件で忙しすぎる生活を反省させると同時に東北工業大学出身の研究者を含めた研究会をたびたび開催しまだまだ未解決の研究課題に取り組みたいと宣言している自分を推し進める力になっています。

つくづく感じるのは、『やっぱり若い人と一緒にいるのはいい』です。

東北工業大学、ならびに同窓会のますますの発展に私も何らか寄与することを約束して寄稿のしめくくりとします。

退職してから

建築学科
小野瀬 順一（おのせ じゅんいち）氏

1942年3月　東京生まれ
1965年3月　東北大学工学部建築学科卒業
1967年3月　東北大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了
1967年4月　東北大学工学部建築学科助手
1969年4月　東北工業大学講師
1973年4月　同助教授
1986年1月　工学博士（東北大学）
1987年4月　同教授
2009年3月　同定年退職
2009年4月　名誉教授

退職したのち、どのような生活になるかは実際にそうなってみないとわからないものです。

私など、基本的には毎日が日曜日、ひまを持て余して家のまわりをうろうろし、ときたま最終講義でお話しした伝統的木造工法、すなわち宮大工の技術についての研究を深化させるために、どこかの古建築を訪れて一人で悦に入っているぐらいのものだろうかと想像していました。

現実はそうではなく、これまでの３ヵ月の間に、県内の丸森、栗駒、遠刈田のほか、福島保原、山形、青森、富山、水戸、京都へと、落ち着きのない慌ただしい生活を過ごしています。ほとんどが耐震診断や耐震補強がらみ、それも現状変更を基本的には許さない文化財建築の耐震補強という難問を含んでのことで、校内業務から解放されたその分、却って忙しくなり面喰っています。現職時代、たっぷりの時間と研究費を頂いての蓄積を、恩返しとして世の中に還元しているのにすぎませんから、苦にはなりませんが、このようなわけで、意識は現職時代と変わりようなく、講義や研修生指導から解き放されて自分の自由なことができた夏休み、春休みの状態にいるかのようです。こうした状況はあと２年ぐらい続きそうで、その後、ようやく本格的な隠退生活がくるのかなあ、そのとき自分の意識は、どのように変化するのかなあと、らちもないことを考えつつ、家にいて頭が疲れたときは、もっぱら暑い日中、目がくらみながら、採っても採ってもきりのない雑草と格闘しています。

ときおり、血圧が高めに推移することがありますが、それ以外は今のところ元気です。

工大の卒業生も１回生あたりは、私よりも先に隠退生活に入っている方も少なくないはずで、いかがお過ごしか伺ってみたいものです。

小野瀬研卒業生主催最終講義・退任記念パーティ（2009年3月7日）
遠方から、また長時間に亘ってご参加いただき、ありがとうございました。

活躍する工大人

製品安全はデザイナーが要（かなめ）

内閣府認証NPO法人
日本テクニカルデザイナーズネットワーク協会（JTDNA）理事
http://www.jtdna.or.jp/
山岸　義彦（やまぎし よしひこ）氏

1951年　北海道出身
1975年　通信工学科卒業
1976年　宮城県民生活協同組合入協（現みやぎ生協）
2003年　ＮＰＯ法人ＪＴＤＮＡ設立に参加
現　職　（有）祥和舎 代表取締役

製品事故の実態をご存知でしょうか。

約７割は使用者の誤使用によるもので、多くは使用方法の説明不足です。

私たちは製品を売る為の努力も必要としつつ、使用者の手に渡った後の製品に最後まで責任を持ち続ける必要も強く感じています。

当協会は「私たちが日本の取説を変えています」をスローガンに2002年より有志により活動を開始し、2005年NPO法人日本テクニカルデザイナーズネットワーク協会を発足させました。「製品事故予防」の普及啓発を目指し、今では各地域で活動を展開し、特に製品事故予防に最も重要である正しい使い方を伝える書面、「取扱説明書」の独自ガイドラインを策定し公表しています。また「本体表示」や「カタログ広告」など、製品の情報を正しく伝える表示・表記の検証事業も展開しています。

〈ＪＴＤＮＡの主な活動内容〉

1. 消費者視点で商品を精査、法的知識や製品事故予防、広告物のコンプライアンス違反を無くすためのテクニックを有する専門職「テクニカルデザイナー」の育成
2. 製品事故が発生した時に早期解決できる専門職「PL アドバイザー」の育成
3. 製品安全対策や、消費者の誤使用による事故を予防するための事業者指導

製品開発から販売広告まで幅広く関与するデザイナーだからこそ製品安全の意識を高く持ち、潜在的な危険を察知する「第六感」を養い、より安全・安心なものづくりに活かしてください。製品安全を形や機能に具体化することが、デザイナーの社会的地位向上につながると確信しています。

活動情報はホームページに掲載しています。会員専用のＳＮＳも開設し、デザインとPL（製造物責任）の研究を行っています。一般会員（無料）になることで参加できます。ぜひ登録ください。

活躍する工大人

風土と暮らしと住まい

由利設計工房
由利　収（ゆり　おさむ）氏
1969年　福島県郡山市生まれ
1992年　建築学科卒業（志田研）
　　株式会社みちのく設計
2001年　由利設計工房　設立
　　現在に至る

1992年3月に大学を卒業後約9年間の設計事務所勤務を経て、2001年に独立。当時私は建築における「素材」の使い方や「環境負荷」への影響について違和感というのか疑問のようなものを感じ始めていました。

事務所を開設するにあたってまず必要になったのは自分の名刺でした。自分の周りには沢山の紙がありますが、その紙がどこで作られているのか？どんな原料からできているのか？何も知らない自分に気付きました。ここ仙台で事務所を開くのですから地元で作られている紙を使いたいと思い、調べてみると自分が住んでいる富沢に隣接する柳生という地区にまだ手透きの和紙（柳生和紙）が残っていることが分かりました。

建築は様々な「素材」で構成されますが、原料やその生産地まで正確に把握できるものは少ないのではないでしょうか？　とても身近にある「木材」もきちんとトレーサビリティを要求しない限り、どこの山で取れた木なのかさえ曖昧です。それどころか森林面積が国土の約７割にも及ぶ日本の家の過半は海外の木材で建てられています。そうしたことが逐一納得できません。　地元に使える素材が沢山あるのに、なぜ大量のエネルギーを消費してまで遠くの国から材料を運んで来なければならないのでしょうか？　そう考えたときにここ仙台という土地の風土があって、そこにはその風土に根ざした暮らしがあって、その暮らしに適した住まいのかたちがあるのではないかと思ったのです。そしてそうした家づくりには職人さんの技術が不可欠です。日本が世界に誇る手仕事も同時に残して行きたいと思うのです。利益の追求や効率を優先することで何か大切なものを失うことになってはいないか、それをしっかり見据えていきたいと思います。のんびりと、でも着実に。

気候風土に呼応する住まい

思いもよらないこと

(独)鉄道建設・運輸施設整備支援機構
鉄道建設本部 東北新幹線建設局 青森鉄道建設所
佐藤　文英（さとう ふみひで）氏
1960年　盛岡市生まれ
1982年　土木工学科卒業（外門研）
1982年　東日本コンクリート（株）入社
1996年　（株）新日本技術センター入社
2007年　（独）鉄道建設・運輸施設整備支援機構入社

早いもので工大を卒業して２７年になります。この間転職を２回経験し、現在は2007年に社会人採用で入社した独立行政法人鉄道・運輸機構に勤務しています。青森鉄道建設所で東北新幹線八戸・新青森間の青森車両基地工事を担当しています。

東北新幹線青森車両基地は、仕業検査線・着発収容線（３線）等がある「車両基地」と保守用車検査線等がある「保守基地」で構成されています。工事内容が多岐に渡るため、軌道・建築・設備・電力・信号・通信などの各系統との調整を行いながらの工事です。新青森開業を控えた厳しい工程のなか、工事管理と開業前の検査の対応に追われる毎日です。

東北新幹線が開業した年、私は社会人１年生でした。当時は青森までの延伸がかなうことはもちろん、自分が発注者側として新幹線工事に携わることになるとは夢にも思いませんでした。

思いもよらない事といえば私の手元にある工事パンフレット「みちのくトンネル」と「青函トンネル」もそうです。前者は、大学２年の時、青森土木事務所での実習の時に、後者は４年の時、外門研究室全員で現場見学の旅をした時に頂いたものだったと記憶しています。この二つを入手後四半世紀過ぎてから再読・再利用することになるのですから不思議なものです。七戸鉄道建設所で八甲田トンネルに携わった時に、みちのくトンネルと平行する部分は、このパンフレットに書いてある地質縦断図も参考にしていました。また青函トンネルは機構の前身の鉄道建設公団時代のことを確認するために再読しました。古い資料が思いがけず役に立つこともあるものです。

最後になりますが、工大の益々のご発展と、同窓生の皆様のご活躍を祈念いたします。

建築限界測定車による測定を行っているところです。
（本線は複線ですが、これは車両基地付近の単線区間のものです）

活躍する工大人

工業意匠学科、弓道部1期生として

前群馬県立高崎工業高等学校長（本年3月まで）
堀口　義雄（ほりぐち　よしお）氏

1949年　群馬県高崎市生まれ
1970年　工業意匠学科卒業
1972年　群馬県県立高校教員
1988年　群馬県教育委員会指導主事（含文部省派遣）
2002年　群馬県県立高校校長（高崎工、渋川工）

迷いから始まった教員生活ですが、魅力ある37年間の充実した時を過ごすことができました。

最初の赴任先群馬県立桐生工業高校では、町並みを観ながら歴史的な街の奥行きを肌で感じ、学校に通うという毎日でした。能力の高い生徒が多く、教員としての授業も毎日充分な準備、教材研究をしながら過ごすことになり、生徒と一緒に力を高めることができたと感謝しています。長期休業中も連日夜遅くまで熱中しながら作品づくりをしたことなどが思い出されます。自分自身も教育の魅力に取り憑かれていった日々であったと振り返っています。

その後、群馬県教育委員会事務局へ異動することになり、教育関係だけでなく県政全般の話題も多く、学校ではあまり意識したことのない予算の重要性に刮目する思いであったことが思い起こされます。また、当時の文部省初等中等教育局職業教育課へと派遣され、中央省庁の仕事の進め方や都道府県との関係、省庁間の施策を調整・整理していく方法等を経験・理解する機会を得ました。社会の仕組みを理念だけでなく多くの実体験のなかで経験することができ、県立高校の校長として、生徒に多くのことを伝える糧になったと感謝しています。目の前の生徒には、『さあ、夢に向かって新しい自分づくりに挑戦しよう』と言い続けてきました。

後輩の在学生諸君には、興味の幅を広げること、しっかり先を見ることの重要性を伝えておきたいと思います。これからも、「夢を持たせ、学生一人一人の生き方を大切にする工大」の発展を祈りつつ、生徒に言ってきた新しい自分づくりに自分自身挑戦していきたいと考えています。

卒業式にて（平成21年3月2日）

創業25年目の近況

(株)フォルム　代表取締役社長
可能貿易(上海)有限公司　常務副総経理
松本　有（まつもと　たもつ）氏

1952年　埼玉県出身
1978年　工業意匠学科卒業
1984年　フォルムデザイン(有)を設立
2003年　(株)フォルムに社名及び組織変更

最近の事例です。私どもフォルムが、5年ほど前からデザイン開発をしている、オクソー（OXO）はニューヨークにある家庭用品メーカーで、ユニバーサルデザインで有名な会社です。

基本的な構想を基に、機構とグリップを共用にした押しボタンをデザインし、いろいろな手があるので誰もが握りやすい形にするため、沢山のモデルを作成しました。

ユーザーインタビューも日本やアメリカ、ヨーロッパで行い、また、各料理の専門家の意見を聞きました。また、今までの容器も含めて多くの実験をしています。何が問題で何が良いのか。良いところも悪いところもわからなければいけないので、それらを数値化しています。

密閉容器は、今まで棚の奥にしまいこまれていましたが、食材をきれいに見せもっと表に出していく、そして、一番のコンセプトは誰でも使えることで、ボタンも指先だけではなくひじや拳などいろんなところで押せるようにしました。

展示会も成功しました。

2007年3月にシカゴのハウスウエアーショーで発表され、9月にアメリカと日本で発売されました。当初は年間30万個をメドにしていましたが、世界的デザイン賞を8つ取れた事も後押しをして、2ヶ月後にはすでに受注が100万個を超え、急遽、金型を増やし、今でも、フル生産を続けています。

今、世界の経済状態は大変だと思うかもしれませんが、実際はすべてがダメなわけではない。いいものをつくれば経済は変わっていきます。先ほどの容器の販売個数は1年2ヶ月で250万個に達している状況です。ヨーロッパでの発売が3カ月前に始まったばかりで、ゆくゆくは年間500万個ぐらい生産したい。そのためには、メーカーだけではなくデザイナーも含めて協力し合っていく必要があります。

活躍する工大人

人生に無駄はない

社団法人日本ジュエリー協会常任理事
（株）インタージェム　代表取締役
佐藤　郁雄（さとう　いくお）氏
1947年　東京都生まれ
1970年　電子工学科卒（3回生　船田研）
1975年　（株）インタージェム設立

私が入学した1966年の工大は、まだ創立3年目で卒業生もいませんでした。皆が将来に夢を持ち自分たちが工大の歴史を創るのだという気概に燃えていたように思います。

私も入学してすぐに同好の志を集めて射撃同好会を作り、2年目の1967年に全日本学生射撃大会においてフリー・エアーライフル部門団体8位入賞という成績を上げ、翌年の1968年に部昇格を果たしました。現在も射撃部の監督として学生の指導をしております。

そして、やはり思い出されるのは船田研究室での同期の仲間との親交でした。時々連絡を取り合い恩師船田先生も交えて旧交を温めておりましたが、悲しくも今年2月に船田博先生が他界されました。先生の御冥福をお祈り申し上げるとともに、もうお会いできないかと思うと残念でなりません。

現在の私は、1975年に仙台でインタージェムという会社を設立して宝石店を経営しております。工大で学んだ電子工学とは全く関係のない職業に就いたことになりますが、決して無駄にはなっていなかったと思っています。

1972 年に渡米してロサンゼルスの米国宝石学会（GIA）で宝石学を学びました。そこでの宝石鑑別試験は屈折計、比重計、偏向器、二色性スコープ、分光分析器などを使って 20 個の宝石を検査して鑑別いたします。20 個のうち 1 個でも間違えると不合格です。試験を受けるチャンスは 3 回しかなく、3 回不合格だと通信教育に回されるという厳しい制度でした。多くの受験者が苦労している時に、私は検査結果を重要視し、検査データーの 1 つでも違っていたらもう一度全ての検査をやり直すという大学での実験のおかげで鑑別試験はすべて 1 度で合格しました。

また、会社を設立してから数々の困難を乗り越えられたのは、学生時代に射撃同好会を創って運営を行い、結果を出してきたことが少なからず役に立っていると思います。

何事も一所懸命すること、たとえ道が違っても決して無駄にならないと思っています。

学生時代から～

(株)庄司組　代表取締役
庄司　一重（しょうじ　かずしげ）氏
1953年　仙台市生まれ
1980年　建築学科卒業
1982年　㈱庄司組入社
2009年　現在に至る

私が、昭和４８年、建築学科に入学するきっかけは、家業が建設業だったことや、国中が開発ブーム、建設ラッシュで、建築家や技術者は、花形であこがれの職種であったことからでした。

しかし、入学したその年に、オイルショックが到来し、日本経済は大打撃を受け、建設業も、一気にしぼんでしまい、低迷時代に入り、就職状況も一変してしまいました。

昭和５５年に、様々な経験をし、楽しかった大学生活を終え、社会人になりました。厳しい現実に右往左往しながらも、仕事をする喜びや、大人としての実感、結婚もし、充実した日々を送っていたように思います。

日本の経済が立ち直り、実感できるようになったのが、昭和６３年頃だったと思います。それから、バブル経済が崩壊するまでの３～４年間が、日本が、日本人が、狂喜乱舞し、経済的にも人間的にも信じられない行動をした時代でした。

庄司組の社長に就任したのが、平成９年、４３歳の時です。バブル経済が崩壊し、５～６年経った頃です。バブル崩壊後遺症が最高潮の頃です。協力業者から、本当に大変な時期に社長になったと慰められましたが、その後１２年間、一度もその時より良い年はありません。更に、悪化する一方でした。

卒業して、３０年、天国と地獄、様々な経験をさせていただきましたが、１人では生きてゆけないが実感です。多くの友人、知人に支えられ、共に頑張る社員がいればこそ、こうやって頑張ってこられたとの想いです。

特に、工大時代の友人や、先輩、後輩、先生方から、多くの指導、助言、協力をいただく機会に恵まれ、同窓生というだけで、ご協力いただいたこともありました。現在の厳しい経営環境の中で、頑張って仕事を続けてこられたのも、このようなお陰と感じております。誠にありがたく、感謝、感激の想いです。今後とも、工大のネットワーク、連携を大切に、頑張っていきたいと思います。

工大人座談会

卒業生が集い、集う場所があり教育に携われる大学であってほしい。

株式会社システムズ

（宮城県仙台市）
http://www.stm-systems.co.jp/

まず、ご自身と御社の紹介をお願いします。

島田：私は電子工学科の4回生です。今年で60歳になりました。

1971（昭和46）年に卒業して現在のユアテック（当時は東北電気工事）に就職。その3年後にはスピンアウトして会社を立ち上げました。それがちょうどオイルショックの時、1974（昭和49）年6月ですので今年で創業35周年です。

島田信一氏

業種は、アナログからデジタルにいたるシステムの設計・販売・施工・保守です。詳しく言えば、まず防犯・防災の情報システムの提供があります。具体的には監視カメラ、緊急地震速報装置、カメラ、ホームセキュリティなどです。

二つ目は各教育機関の視聴覚設備やシステムの設計・施工です。工大の講義・会議支援システムも設計・施工させていただきました。

三つ目は、非常放送、ナースコール、デジタル電話交換機、ＬＡＮ、大型映像表示装置、電光掲示板などの情報通信システムの提供があります。東北大学付属病院のナースコール設備や仙台空港の大型映像システムなども手がけました。

四つ目は放送局や業務用放送機器、編集機器などの設計施工の他、業務用のコンテンツ制作も行っています。

最近では映像や音響、コンピュータ事業に力を入れており、売上比率でも視聴覚や映像などのコンピュータ設備が約半分くらいです。

小幡：情報・通信・メディアを一括的に表現できる会社だと思います。

例えば最近ですと、この地域（仙台市中心部）のｅモバイルのアンテナ基地工事をすべてやりました。

小幡早苗氏

その他、大崎八幡神社内の映像。そういえば、天皇陛下が蔵王で植樹した際の映像撮影は、総務省など国からの発注でしたし、女川・新潟の原発の公開ヒアリングの撮影もありました。さらには入学式卒業式のビデオ撮影やプロジェクターなどの機器レンタルなども業務のひとつです。

島田：Ｋスタ（クリネックススタジアム宮城）の中継用放送設

＜出席者＞
島田　信一氏／代表取締役・本学評議員
1971 年電子工学科卒（4 回生・大野研究室）
小幡　早苗氏／取締役・コールテック（株）代表取締役・本学同窓会監査役
1971 年通信工学科卒（4 回生・橋本・古賀研究室）
二瓶　宗則氏／セールスシステム本部グループリーダー
1993 年通信工学科卒（25 回生・高野研究室）
鈴木　裕介氏／システムエンジニアグループリーダー
1995 年電子工学科卒（27 回生・平舘・庄司研究室）
＜聞き手＞
榎本　　幹　／本学同窓会顧問（1968 年電子工学科卒・1 回生）
知能エレクトロニクス学科・名誉教授
古賀　秀昭　／本学就職部長・環境情報工学科教授
高橋　郁生　／本学キャリアサポート課課長
高橋　正行　／本学同窓会総務部長（1983 年土木工学科卒・12 回生）
長町校舎事務室事務長

（株）システムズの設計施工による、工大 9・10 号館に施行された講義・会議支援システム

備や音響設備、ユアスタ（ユアテックスタジアム仙台）の大型映像、宮城スタジアムの映像関係やワールドカップも含めたセキュリティ関係も、すべて弊社が行った仕事です。

御社ではどのような人材を求めていますか？

島田： ITに精通した方です。でも、実際には大学新卒者がすぐ現場の仕事に取り組めるかといったら難しく、現場に対応できるまで2、3年は掛かります。特に弊社の営業部門は専門技術も必要ですから厳しい部署です。入社後は多くの場合、現場、営業などいろいろな部署を経験させた上で適切な部署へ配属しています。

二瓶： 私の場合は例外で、入社後すぐ営業に配属されました。私が入社したのはちょうどバブルがはじけた頃の不景気だったからかもしれません。

島田： 二瓶君の入社時には、2 人の工大生が受験に来ました。どちらを採用するか迷いましたし、私は面接がすごく苦手なので全部小幡君が面接しました（笑）。あの頃は女子学生が 20 人ぐらい受験に来て、書類選考から大変でした。

榎本： 二瓶君はなぜシステムズに就職したんですか？

二瓶： 音響工事がしたかったからです。でも、社長から3年間は営業をやってくれと言われて…。正直なところ、当時営業は一番やりたくない仕

二瓶宗則氏

事でした。でも、やってみるとおもしろいところが見えてきました。

高橋郁：システムズさんは営業技術をいち早く導入した企業ですね。専門技術をもった営業だと客先で図面を変更できるとか、現場での効率が上がっていると、本学内の実務をとおして実感しています。そういうことが二瓶さんの採用に結びついたのでしょう。

高橋正：営業部門以外はどんな部署がありますか、鈴木さん。

鈴木：私は技術職のシステムエンジニアグループに所属している鈴木です。1995（平成7）年電子工学科卒です。入社時は工事関係を経験し、その後営業を経て現職です。現在の仕事は、学校関係の視聴覚施設、放送局やケーブルテレビ局のシステム設計・施工業務です。

鈴木裕介氏

弊社は営業部門の「セールスシステム本部」の他に、映像制作システムの構築から制作、配信を行う「ブロードキャスティングプロフェッショナル本部」、そして資材・積算・工事施工・保守点検・修理を行う「テクニカルサポート本部」で構成されています。仙台市若林区卸町にある本社の他、東京本部、埼玉、栃木、福島、秋田にオフィスがあり、東日本の広いエリアが活動範囲です。

工大の卒業生は何名ですか？

島田：（株）システムズ本体の社員は48名、工大卒はグループ企業を入れて6名です。

高橋正：グループ企業とは？

島田：(株）システムズの他、携帯電話販売やPHS販売等を行っているコールテック(株）と、電話関連業務、映像制作業務を行う（株）コムラインの3社です。

仕事で工大に来てみて、今の学生をどう感じますか？

二瓶：以前に比べて格好は派手になっている一方で、気遣いや優しさが増えたような気がします。荷物を持っているとドアを開けて待っていてくれたりしますから。

古賀：最近は挨拶をする学生が増えてきています。挨拶をしろと言っているわけではありませんが、他の学科の学生にも挨拶をされることが増えてきました。家庭のしつけや高校でのしつけも影響しているのかな。

高橋郁：工大高校では以前よりしつけが厳しくなり、最近では遅刻がほとんど無いそうです。

古賀：それが工大に来て、だんだん崩れてくるようじゃまずいね（笑）。ところで二瓶さんと鈴木さんのご出身は？　クラブ活動は？

二瓶：出身は地元仙台です。工大時代は友人とスポーツ同好会を作りました。スポーツにこだわらず、キャンプやバーベキューなど遊び感覚で何でもやろうという会です。当時部員が20人ぐらいいたのですが、その中でコミュニケーションをと

るということが後に役に立ちましたね。

鈴木：僕も出身は仙台です。僕らの年代が最後の平舘研究室の出身者でもあります。

島田：弊社は仙台出身者がほとんどです。地元に貢献し、地域を盛り上げようということです。

ところで、島田社長と小幡さんの出会いを教えて下さい。

小幡：工大を卒業してセコムにいた頃のことです。希望していた技術職ではなく、強制的に営業職に回されたことが島田社長と出会いを生み、人生の転機になりました。こうしてつきあいが密になり、不思議なことに自分が考えていることを島田社長も言い始めたり、いっしょにいておもしろく疲れない存在でした。

島田：学生時代、小幡君とはクラスもいっしょになったこともないし、つきあいはありませんでした。その後会社を立ち上げてから、営業活動をしている中で出会い、やがて「うちに来い」とずっとラブコールを送り続けていました。

小幡：セコムに勤める前は時計会社（東京時計）にいましたが、入社3年目で会社は倒産してしまいました。

当時の車搭載用アナログ時計は正確性に欠けるため、水晶時計に変えるためのモーター部分の設計をしていました。それが会社の救世主になるといわれ、1年を懸けて図面に仕上げました。ところが当時の上司がその図面ごと他社へ転職してしまって結局会社は倒産の憂き目に…。

大学時代は研究室対抗でゲームをやったり、飲み会などで楽しかっただけに、実社会とのギャップは大きく、山あり谷ありでした。

左から島田氏、小幡氏、古賀氏

最近、早期退職が問題になっています。経営サイドが求めている人材について、実際現場で働いている若い方々や後輩に何かアドバイスをいただきたいのですが。

島田：元気で笑顔の人を求めます。それは第一印象で決まります。第一印象が良くないと、性格まで見えてくるような気がします。

それぞれの人生観や考え方があるので、会社を辞めることがやむを得ないこともあるでしょう。しかし、入社した以上は本当に仕事が嫌いでなければ、続けた方がいい。我々も仕事を続けられる環境をつくってやることが大事だと思います。

今の若い人たちは気持ちの裏表にとても差異があるような気がします。会って話しをしたときと、実際の行動が違う。失敗を起こしそうにない人が失敗したり、入社して数年後に本性がでたりボロが見えたり。逆に目立たない人がきちんとした仕事をしたりします。

結果的には、コツコツと地道に実績を積んでいった方が早道です。でも今の若い人たちは、結果を急いで一発勝負的に夢を実現したいという考えの人が結構います。

榎本：最近の本学の学生は「創造から統合へ」という感覚を学んでいます。「自分の仕事は社会に還元されて有益になる、その仕事とは何だろうと探す」これが技術系の教養教育の本質であると岩崎前学長は言われます。自分のやっている仕事が社会の役に立っていると意識できる「創造から統合へ」の実践。それを島田社長は実践しているし、若い人たちの面倒を見てくれています。

島田：バブルの時期はどんどん仕事が来て忙しくなり、細かい部分まで面倒みきれなくなりました。次の利益をあげる仕事を優先しなければならない時もあります。でも、そういう状況でも誠実に対応するべきだし、そうしたことで評価されていると思います。営業とは一旦納品してしまえばそれで終わりではなく、何年か後のリニューアルの時にも関われるようにしていくことが大事です。

工学と経営とのつながりはどんなことですか？

島田：学生時代に経営学を学んだ人より、意外に工学系でいろいろな仕事を経験した人のほうが長続きするような気がします。実際の経営は理論ではない部分がすごくありますから、経営的な理論より工学系の技術とか現場経験が有効だと思います。

　また、経営とは実践して覚えていくものであり、やらなければ分からない分野です。資金繰りも大切ですがそれは会計士にまかせ、社長はベストセールスマンでなければならないということです。

榎本：本学の沢田学長が「東北地方の企業の社長の出身大学を調べると、工科系大学の中では工大出身者が一番多い」と言っています。「工大as NO.1」ですね。

　会社というのは、人を育て、人を新しく開拓していくことを未来永劫やっていかなければならない。そういう感覚を持っている人が工大の卒業生の中に沢山いるということです。

榎本氏（左）と島田氏

島田：私が考える究極の大学とは、OBや卒業生が集まる大学です。卒業すると大学に行くことが無くなります。卒業しても気軽に行ける大学、結婚して、子どもを連れて行ける大学というのは最高だと思います。OBが教育に携われる場を作ることも大切。工大をそういう大学にしたいですね。

高橋郁：1回生がおととし還暦を迎えました。工大人の中でようやく新入社員から定年年齢まで揃いました。ここから工大の新たな歴史が始まるのかなと思いました。

島田：還暦にみんなで揃って大学へ行こう！というようなことがあっていいですよね。卒業生が自由に工大に来て自由に使える部屋があればいい。そのために大学も同窓会もなにかやるべきだと思います。

高橋郁：還暦になった同窓生に工大から招待状を送り、いま

までの頑張りを表彰するというのもいいかもしれないですね。

高橋正：そのようなセレモニーに、一番町ロビーも活用していただきたいですね。

ところで、工大は、大学院や環境情報工学科を設置するなど大きな成果を遂げてきたと思います。さらに、昨年は、これまでのモノづくりと文系的要素が融合した、文理融合型のライフデザイン学部を立ち上げました。その最初の入学生の就職活動が、来年から始まるので、卒業生の皆さんに何かとご協力願いたいということです。

高橋郁：これまでは文系の大学から人材を採用していた分野でも、工大は十分対応できるということです。さきほどの営業技術職などのように。

では学生へのアドバイスをお願いします。

島田：先日、経営コミュニケーション学科の先生から勉強させてもらいたいという連絡があり、弊社に7月に30人ぐらい企業研修に来る予定です。そのときにでもしっかり現場の話をしたいと思います。

二瓶：営業でも技術でも、結局はお客様のために行う仕事です。その場しのぎでは結果的にお客様のためにも自分のためにもなりません。

先ほど話したスポーツ同好会の部員もみんなそうでしたが、今の学生も若い社会人も何をやってもノリが軽い。逆に責任に関してはみんな引き気味。つまり重いのはダメという人が多いのでは。でも、責任は自分でとる気持ちがなければ、社会に出ても上手く行か

ないと思います。

私の場合は、学生時代における先輩後輩の関係や、アルバイトで人間関係を実践的に学んだことが良い経験になりました。

私は入社して営業に配属された時、目標とする先輩に追いつき追い越せとコツコツ仕事をしました、その結果、その後お客様に信頼され何千万円かの新規契約が取れました。お客様に信頼されるということは、社会のためであり、会社のため自分のためでもあると思います。例え希望と異なる職種や職場でも、社長が言ったようにニコニコして、コツコツ続けていればいつかは良い方に向かってきます。

鈴木：僕も、エンドユーザーを考えて仕事をしていくことが自分の成長につながると思います。企業って、社員の一人ひとりの人間性も含めた総合力ですよね。

二瓶：仕事は人に付いてくると思っています。弊社はそういう意味で、個人を大切にする会社ですし、何でもできる、風通しのいい会社です。

高橋正：最後はすっかり御社のPRになりましたね。さすがは営業のリーダーです（笑）。

本日は皆さんありがとうございました。

（2009年6月10日取材）

働くということのやりがい

情報通信工学科４年　馬場 香織さん
受入企業／（株）廣済堂・（株）SJC

三年の夏、就職活動を始めようにも企業や職種について漠然としたビジョンしか持っていなかった私は、自分の業種に対する適性や、企業というものがどういうものかを理解するためにインターンシップに参加しました。受け入れて下さった企業は㈱廣済堂と㈱ SJC です。ここで私は、企業の方にして頂いた様々なお話や、営業職とＳＥ業というまったく違った業種の体験などを通して、営業職での契約を取れた時に感じる嬉しさ、そしてＳＥ業に要求される様々な能力や責任、何より皆で協力して一つの事を成し遂げる事から得られる喜びや仕事へのやりがいなどを学ぶ事ができ、自分が目標に据えていたもの以上の様々な事を学ぶ事ができました。この夏の体験で得たものをこれから社会人になる自分の礎にし、頑張っていきたいと思います。

自分だけの情報として

建設システム工学科４年　坂本 和輝さん
受入企業／（有）東北構造社

当時ぼんやりとしか理解していなかった「仕事」とはなにか、という疑問を解決するためにインターンシップに参加させていただきました。

実習内容としては図面のチェック作業が多く、作業の半分以上が実際に使われるものだとお聞きしていたので、緊張感を持って作業ができました。また、設計には私が思っていたより多くの計算を要することがわかり、日々の勉強の大切さも感じました。

インターンシップでは学校では学べない「現場の雰囲気」というものが感じられました。この経験は就職活動の際に、他の人は持っていない、自分だけの情報として活用できました。また普段の学校生活において、身だしなみや挨拶といった基本的なことを正す良い機会にもなったと思います。期間中指導してくださった皆様に、心より感謝申し上げます。

就職へ向けて

デザイン工学科４年　菅原大樹さん
受入企業／秋田県仙北市役所

行政の仕事に興味があり、実際の現場を体験、勉強し、自分の適応性を知りたいという思いからインターンシップに参加しました。

私の出身地である秋田県仙北市役所観光課での実習は、主に観光地の視察、観光パンフレット用の写真選定、観光ポスターやパンフレットの送付作業といった内容でした。

東北有数の観光地として、観光資源や施設を維持し、発展させていかなければならない観光課の仕事は、その地域に住む方々の理解や協力が必要であり、そのための人間性や信用を備えることが重要だと思いました。

インターンシップに参加したことで、普段の学生生活ではできない経験ができ、就職への意欲が湧きました。今回お世話になった方々にとても感謝しています。

職業選択が広がった

建築学科４年　仙石 知見さん
受入企業／宮城県雇用支援協会

私は三年生の夏、宮城県雇用支援協会で５日間のインターンシップに参加してきました。

そこでは、主に関係機関と施設の見学をしてきました。

インターンシップの参加を決めた理由は、工学系以外のことを体験してみたいと思い、雇用支援協会の仕事とはどういうことをするのか興味を持ったからです。

様々な雇用関係の場所に見学をしに行ったので幅広い年代の人たちや障害者の人たちと接することができ、障害者の人たちが元気に挨拶をしている姿を見て、見習わないといけないと思い改めて元気に挨拶をするということは大事なことだと実感しました。

インターンシップは今までの自分を見直し、これからの将来に向けて目標が明確になり前進することができました。

【青森支部】
青森県支部のさらなる飛躍へ 2009

青森支部幹事
黄金﨑　勉（こがねさき　つとむ）氏
1980年　建築学科卒（11回生）

平成21年6月19日（金）青森県支部同窓会幹事と後援会、大学の先生方との懇談会が青森市内の『いぶし銀』にて開催されました。

青森支部の同窓会は隔年の開催とし、今年は支部全体では開催されませんが、父母懇談会の前夜にあわせての懇談会となりました。

後援会副会長の小泉様、建築学科の谷津先生を、はじめとする教職員の方々、地元後援会の方々と、20数名で和やかに開催されました。
谷津先生からの近況報告の中で、卒業生が約3万人になること、在籍者の状況、学生ラウンジの紹介などがあり、充実された大学の雰囲気が伝わってきました。

大学案内のパンフレットも今まで以上にデザイン化されライフデザイン学部の活躍も成果が出ているように感じられます。恵まれた環境の中での大学生活。今後ますますの人材育成に期待いたしております。

懇談会も盛り上がり、お店の余興である、かわいい女の子の手踊りが始まるとなお一層会場がにぎやかになりました。

日本酒の勢いも増し、楽しい場の時間が過ぎるのは早く、2時間は、あっという間でした。後援会奈良青森支部長の中締めにより懇談会は終了となりました。ご苦労様でした。

2次会では、なつかしのメロディーが次々と流れ、明日の父母懇大丈夫?の雰囲気でした。

卒業してからも大学との交流が密に保たれることへ改めて感謝しております。

来年は盛大な同窓会になるよう努力するとともに、また新たな人との交流が深まりますことを期待いたしております。

最後に今回参加していただいた先生方に、深く感謝申し上げご報告といたします。

平成21年青森県支部同窓会

【新潟県支部】

第13回新潟支部会総会を終えて

新潟支部会　会長
篠川　恒（ささがわ　ゆみはる）氏
1973年　土木工学科卒
現　　在　新潟市水道局非常勤嘱託

同窓会新潟支部会の活動に同窓会本部のご支援大変感謝しております。

今年も、平成21年6月6日（土）新潟ユニゾンプラザにて後援会主催の父母懇談会が開催されるのに合わせ、第13回東北工業大学同窓会新潟支部会が開催されました。

神山先生の大学近況報告をお聞きした後、支部総会に入り、議題では今後支部会の活動を活発にするためにも同窓会本部との連携を強める事を可決し、同窓会総会への参加を議決したところです。

昨年初めて計画し実施した後援会新潟県支部との大学祭に合わせた合同大学見学会では、在校生２名との意見交換も出来大変有意義に過ごせました。しっかりした考えを持ち大学生活を送っていることがわかり頼もしく思ったところです。卒業してしまうとなかなか大学に行く機会を作れないことから会員の中では大変興味を持たれました。又若い会員から会の運営に協力したいとの意向がよせられ心強く感じています。

総会完了後、父母懇談会に出席された方・後援会・大学関係者との懇親会が開かれ我々で可能な東北工業大学の発展のため何が出来るか、又卒業された学生さんにどのような支援が出来るかなど有意義な意見交換がなされたほか、新潟出身の在学生が減少していることから、後援会新潟支部と連携をとりながら大学に新潟出身者を増加させる方法など意見交換を行いました。

最後に、同窓会の皆様、大学関係者の皆様のご活躍を願い、新潟支部会の報告を終わらせて頂きます。

大学見学会にて

意見交換会

同窓会事務局からのお知らせ

「東北工業大学一番町ロビー」での卒業生の作品展示を支援します！

本学のユニバーシティスローガン『創造から統合へ―仙台からの発進』をさまざまな形で実現することの一環として開設した「東北工業大学一番町ロビー」は、今年で６年目を迎えております。

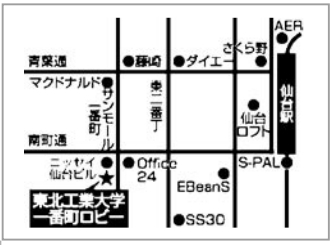
その間の来館者数は累計で概ね５万人を超え、年を重ねるごとに多くの市民の方々からも親しまれる“まちの中の大学”として、着実な歩みを示してきています。

４階ホールでは、本学教員による「公開講座」「リカレント講座」「未来科学講座」･宮城県教育委員会との共同の「高大連携講座」･宮城県美術との共催の「まちなか美術講座」や本学同窓会・本学後援会・企業・各種協議会等の集いにも利用されています。

１階のギャラリーでは、本学教員（学科企画紹介）や学生（課外活動や卒業制作展）と卒業生による展示企画(写真参照）の他、大学教員と関わりある企業・地域生産組合・各種協議会との共同企画展示等を行ってきております。

尚、本同窓会では平成20年度の総会において、同窓生企画の支援を積極的に行うことに位置づけました。

ロビーの使用に関しては本学ホームページ（http://www.tohtech.ac.jp/news/lobby/）をご覧ください。また使用の諸手続き等は、東北工業大学一番町ロビー（ Tel 022-723-0538・ E-mail/lobby@tohtech.ac.jp）か同窓会事務局まで申し出ください。



←「津田幸範油絵展」
2008年10月31日（金）～11月5日（水）
（入館者数 190 名）

津田幸範　氏
工学部工業意匠学科 1977 年度卒

「原付 50cc ミニカーのメカニズムと→
エコとしての進化
～高齢者も気軽に乗用できるエコカーへ～」
by 吉村　東
2009年5月1日(金）～5月13日（水）
（入館者数705名）

吉村　東　氏
工学部建築学科1979度卒
2002年度大学院修了

お願い

メールアドレスを知らせてください！

本同窓会および工大、工大後援会などが開催する各種事業をメールでお知らせするため、同窓会メーリングリストを作成することにいたしました。

同窓会や工大に関わる情報をスピーディーにお伝えすることができると考えております。

情報の配信・受信可能な方は、同窓会ホームページを利用してメールアドレス等をお知らせください。

なお、いただいたメールアドレスについては本同窓会事務局で管理し、本同窓会及び工大の事業関連情報以外の告知には使用しません。

ご協力よろしくお願い申し上げます。

メールアドレス登録の仕方

①工大同窓会ホームページ（http://www2.odn.ne.jp/~aan98460/）を立ち上げてください。「東北工業大学同窓会」で検索しても立ち上げは可能です。

②トップページにある【メールアドレスを登録する】の文字か、左下の【登録】バナーをクリックしてください。

③表示された登録フォームの項目に、おなまえ、メールアドレス、卒業年度、卒業学科名を必ず記入してください。、その他の項目は可能な限り記入し、最後に【登録】をクリック。これだけで登録完了です。

②トップページにある【メールアドレス登録】の文字か、左下の【登録バナー】をクリックします。
③表示された登録フォームの項目に記入したら、最後に【登録】をクリックするだけ。これで登録完了です。

東北工業大学同窓会
第 25 回定時総会のご案内

開催日時：平成21年9月26日（土）

定時総会／16：30〜17：30　懇親会／17：30〜19：30

会　　場：仙台国際ホテル

仙台市青葉区中央 4-6-1　☎ 022-268-1111（代）

議題：①平成20年度事業報告 ②平成20年度決算報告 ③平成20年度監査報告
④平成21年度事業計画 ⑤平成21年度予算案　⑥役員改選、その他

懇親会参加費：3,000 円

※参加費は当日会場にて徴収いたします。

懇親会には多くの先生方もご臨席されます。同級生、研究室やクラブの同窓生等、お誘い合わせの上ご参加ください。

卒業された皆様へ

東北工業大学同窓会　会費未納の方へ

同窓会会費は会員間のネットワーク化事業、在学生への支援、支部活動の推進、本学および本学後援会との共同事業等を進めるために有効に活用しております。つきましては、同窓会会費未納の方は、別紙郵便振替通知書で、早急に納入いただきますようお願い申しあげます。

●終身会費　20,000 円

（5,000 円×４回・10,000 円×２回の分割納入方法もございます）

●郵便振替口座

02280-5-22263　東北工業大学同窓会

※すでに納入済の会員には、郵便振替通知書は同封しておりません。
本会運営の趣旨をご理解の上、この通知をご御容赦ください。

編　集　後　記

本同窓会副会長をさせていただいております佐藤　明です。

この４月から、工大新技術創造研究センターに勤務しております。これまで、宮城県及び産業技術総合センターなどで培ったノウハウを活かしながら、産学連携活動を通じ、工大発展に貢献できればと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

さて、工大人も今回で 13 号の発行になります。これまで発行にあたりご尽力いただいた方々に感謝申し上げます。また、来年、学校法人創立 50 周年になります。さらなる飛躍に向けて、同窓会としても会員間のネットワーク強化。教職員や学生、さらには後援会の方々との連携活動を積極的に行いたいと考えておりますので、会員皆様のご支援、ご協力よろしくお願い申し上げます。最後になりましたが、寄稿をいただきました岩崎理事長、沢田学長はじめ多くの皆様に感謝申し上げます。

東北工業大学同窓会　副会長　佐藤　明

発　行：東北工業大学同窓会
事務局：東北工業大学キャリアサポート課内　〒 982-8577　仙台市太白区八木山香澄町 35-1
TEL.022-305-3336　FAX.022-305-3337
URL.http://www2.odn.ne.jp/~aan98460/